

Aizu Taro (Japan)

My Home Town, Fukushima

English Version is [here](#).

French Version is [here](#).

Profile

Taro AIZU, originaire de Fukushima, a écrit un texte sur sa ville natale. A la fois narratif et poétique, ponctué de courts poèmes, il traduit bien le sentiment douloureux des Japonais navigant entre le désarroi dû à la catastrophe nucléaire et l'amour de leur pays.

会津太郎(日本)

わがふるさと、福島



1

たいていの日本人は、毎年夏になると故郷の町に帰り、先祖の墓の前で両手を合わせる。そして御先祖様の霊を慰めたり、また自分の近況を報告する。私もその大多数の日本人の一人として、毎年お盆になると生まれ故郷に帰り、亡くなった両親の墓に両手を合わせていた。しかしことしのお盆は、帰ろうかどうかどうしようか、私は迷った。それは三月十一日に私のふるさと福島で、原子力発電所が地震と津波の影響で爆発し、セシウムという放射能が周辺に流れ出たからだ。そのセシウムは風や雨に流され、福島県全体へ、いやその近くの県から東日本全体へと広範囲に流れ出た。しかし二、三日よく考えてから、セシウムは乳幼児や子供の将来には悪影響を与えるが、初老の年齢に差し掛かった自分には悪影響はないと私は信じた。

そしてお盆の前日、新宿駅から深夜高速バスに乗り込むと、仮眠をしながら、夜行バスに揺られ、私は朝早くふるさとに着いた。寝ぼけたまなこには、今までと何も変わらない、朝の田園風景が果てしなく広がっている。

こんなにさわやかに

こんなに輝いているのに

福島の田んぼが

ほんとうに

汚れてしまったのか



2

その日、私は兄の家に泊まった。そして翌日、兄の子供たち、甥たち二人を連れて、散歩に出かけた。するとその途中、甥の一人が突然叫んだ。

「あっ、ガラスバッジ忘れた。取って来るよ。」

その甥っ子は走って家に帰り、胸にガラスバッジをぶら下げながら戻ってきた。福島では、子供たちが外出する時はいつでも、胸にガラスバッジをぶら下げることになっていた。あとでガラスバッジを集め、その中にたまったセシウムの数値を調べるという話だった。私たちは土手をぶらぶら歩いておしゃべりをしながら、広々とした河川敷の中へ降りて行った。しかしその公園には、私の甥っ子以外に子供たちの姿は見られなかった。ふだんは大人たちが子供や孫を連れていっしょに遊んでいるのだが、その日は私たち以外に遊んでいる人は全然いなかった。たぶん子供たちは放射能汚染を避けて、家の中でテレビを見たり、ゲームをしたり、マンガを読んでいるのだろう。というのは、学校の先生が子供たちに外ではあまり遊ばないようにと指導しているからだ。しかし甥っ子達は久しぶりに外に出たせいか、思いっきり走り回った。

子供達が
ガラスバッジを
胸にぶら下げながら
芝生の公園で
私とオニゴッコ



3

空がだんだん曇ってきたので、子供たちを連れて急いで家に向かったが、途中で少し雨に打たれた。
軒下では猫もからだをていねいに舐めていた。

からだに付いた
セシウムまで
知らず知らず
舐めてしまう
福島猫



4

原発のすぐ近くに住んでいた全ての住民は、強制的に避難させられたり、また自主的に自分の家を捨て遠くへと引っ越したりした。特に幼児や赤ちゃんをかかえた若い親たちには、遠くよその県へ引っ越す人もかなりいた。だが老人達は、裕福であってもなくても、よその町や村に移り住みたくはなかった。今さら新しい町や村に引っ越して新しい方言や習慣を覚えたり、新しい人間関係を作るのが何よりも面倒だった。それに慣れ親しんだ友達や近所の人達と別れるのが辛かった。長年馴染んできた山や川の風景と別れるのが辛かった。

「避難しろ」と言われても

自分の老後を

自分の村で

平和に過ごしたい

福島の人



5

真夏の夜、居間でサッカーのテレビ中継を見ながら、よく冷えた桃の皮をむいて、みんなで食べていた。福島は桃、梨、リンゴなど果物で有名だが、その桃はとても甘く水分が豊かでとてもおいしかった、しかしその時に微量のセシウムが私のからだの中に入ったかもしれない。それは見ることもできず、聞くこともできず、感じることもできない、セシウムという無味無臭の敵だ。しかし正直に言えば、微量のセシウムがほんとうに敵なのかどうか、私にはわからない。ある専門家は微量の放射能なら健康によいかもしれないとまで言っている。ところが別の専門家はたとえ微量であっても非常に危険だと言っている。どちらが本当なのか、素人の私にはよくわからない。厳密に言えば、その専門家たちでさえ、よくわからないのだろう。十年、二十年と時間がたって結果がはっきり出れば、誰にでもわかるのだろう。しかしそれまでじっと待つことはできない。将来私が癌にかかるのかどうか、私は今知りたいのだ。だが今、私には知る事ができない。もしも神様がいるなら、神様だけがそれを知っている。しかし神様がいなかったら、この広い宇宙の中で私の未来は誰にもわからない。

無味無臭の

微量のセシウムが

静かに存在する

細胞の奥の

闇の世界



6

その夜遅く、私は兄と二人だけになって、放射能汚染について話し合った。その時兄が言ったことは、私にはとてもショックだった。それは原発の近くに住むある酪農家の話だった。私は翌日、念のためにいろいろな雑誌を読みながら、彼の事件を詳しく調べた。その事件は次のような内容だった。

福島原発の近くの小さな村に、ある酪農家がフィリピン人の妻、二人の息子といっしょに平和に暮らしていました。彼は四十頭の乳牛を飼いながら、妻と二人で毎日一生懸命に働き、二人の息子にも恵まれたので、家族みんなで幸福に暮らしていました。ただ子供達がまだ小さかったので、その生活費を何とか稼いだそうと思い、借金をしながらも、新しい作業場を建て、酪農の事業を拡大していきました。さらに小学校に入学する息子のために、新しいランドセルを買って、四月の入学式を楽しみに待っていました。

しかし三月十一日に起きた地震と津波が原因で、福島原発が突然爆発しました。原発から漏れ出たセシウムは、毎日毎日雨風に流され、村や田畑や森林を静かに汚染していきました。その汚染は目で見ることでもできず、耳で聞くこともできず、鼻で嗅ぐこともできません。そして彼が毎朝与えていた餌に原因があったのか、それとも飲み水に原因があったのかよくわかりませんが、知らず知らずのうちにセシウムが牛のからだの中へ入りました。その結果、牛達のミルクには基準値以上のセシウムが含まれたのです。出荷できなくなったそのミルクを、彼は毎日毎日捨てなければいけませんでした。

牛だけではなくて子供たちにも放射能が危険だと知ったので、彼は妻と息子をフィリピンへと避難させたのです。そして彼は、あんなに楽しみにしていた息子の入学式を見ることはできませんでした。でも彼は家族の生活費を稼ぐために、ひとり村に残って、また酪農の仕事を一生懸命に続けたのです。それでもミルクに含まれるセシウムはいつこうに減らず、ついに酪農をあきらめ、自分も家族といっしょに暮らすため、フィリピンへ出発したのです。しかしフィリピンに行っても、彼は英語もタガログ語も話せなかったのが、仕事を見つけることができません。そして結局、彼だけが一人日本へ戻ってきたのです。でも牛達も家族も村にはもういません。彼は根っこを失くした1本の木でした。

「原発さえなければ」

と黒板に書き残し

作業小屋で亡くなられた

福島の酪農家

享年54歳



7

そしてある日の午後、兄の家族みんなと一緒に、近くの湖へドライブに出かけた。でもそこには、観光客がほとんどいなかった。やっぱりセシウムの影響だろうか、いるのは地元の土産物屋の店先で退屈そうにしているおやじさんやおばさんだけだった。私は土産物屋を覗き込みながら、日焼けしたおやじさんに話しかけてみた。

『ことしは、お客さん、少ないですね。』

おやじさんは身を乗り出してしゃべり始めた。

『まったくだ。ここらへんは基準以下のセシウムなのに、みんな来なくなっちゃった。これ、風評被害ってやつだべ。』

『でもねえ、微量でも将来、子供や赤ん坊に癌の影響を与えるかもしれないんですよ。』

するとおやじさんの日焼けした顔がムツとなった。

『国が大丈夫だって言ってんべ！』

私は土産物屋のテーブルに腰をおろし、ゆっくり話し始めた。

『おじさんは、人を信用する本当にいい人ですよ。でも、国を信じ過ぎますね。自分の子供を守るためには、国が言うこと、あんまり信じちゃいけないですよ。子供に症状が出てからじゃ遅いんですよ。だから子供がいる親達は、福島観光地、避けてるんですよ。福島の食べ物、避けてるんですよ。』

『何言ってるんだ。そんじゃ、福島の子供はどうすんだ。俺達の子供はどうすんだ。セシウム入った野菜、毎日食ってた。それで将来、癌になったらどうすんだ。』

その気迫に圧倒され、私は黙り込んでしまった。

『あんたら都会の人は食べ物選べるけど、おら達地元の間人は食べ物なんか選べねえんだよ。福島で採れた食べ物しか食えねえんだよ。結局、福島の子供が一番貧乏くじ引くつぺ。』

私は意を決して言った。

『そう、そうなんですよ。でもなんとかして、福島の子供もいっしょに助かる道を探さなくちゃいけないんですよ。福島の子供だけ、犠牲にするわけにはいかないんですよ。福島の子供、癌の実験材料にするわけにはいかないんですよ。』

おじさんは顔を輝かせ、にっこりと笑った。

『そうだ、そうだべ。』

でもそのあと、すぐに眉をひそめて言った。

『でもおめえさんはどっちの味方だ。福島か、それとも都会か。』

私は静かに答えた。

『おら、両方だつぺ。おらは福島で生まれで、この福島で高校生まで18年暮らしただ。今は都会に二十年住んでっから、どっちの気持ちもわがなべ。』

おじさんは私の福島弁に驚き、そしてにっこりとほほえんだ。

『そうだべ。おめえさんの言うとおりのだ。福島の子供、癌の実験材料にするわけにはいかねえ。絶対にいかねえ。でもなあ、どうにもできねえんだよ。自分の子供がセシウム入りの野菜食ってるのは、よくわかってる。よくわかってるから自分の子供が癌にならねえようにただ信じるしかねえ。祈るしかねえんだよ。』

おじさんは湖の方を眺めた。湖の青い水面はいつもの夏と同じように銀色に輝いている。湖から吹いて来る風も、いつもの夏と同じように涼しく吹いて来る。そして地元の人達の方言も、いつもと同じよう

に素朴に響いて来る。みんな去年と同じままだった。それなのに湖で泳いでいる子供たちの姿が見えない、砂浜で遊んでいる子供たちの歓声が聞こえない。

返って来い

返って来い

子供達が外で遊べるような

普通の町

福島よ 帰って来い



8

湖を眺めていたおやじさんは私の方を振り向くと、大きな声で言った。

『信じることはいいことだっぺ。でもなあ、信じてばかりじゃだめだっぺ。ほんやり信じてる暇なんかあったら、働いて、金稼いで、毎日子供にめし食わせないとだめだっぺ。』

私は苦笑いしながら、念を押すつもりで言った。

『でも、子供にはセシウムが少ない食べ物を食べさせたほうがいいべなあ。』

『ああ、わがった、わがった、そうだべ。子供や孫は、一生、癌のこと心配しながら生き続けるんだ。やっぱりつらいべえ。それに発病したらもっと大変だべ。先祖代々丈夫なからだを引き継いできたのに、俺の子供の代から癌になっちゃったら、俺は御先祖様みんなに土下座してお詫びしなければなんねえ。そんなことになったら、俺の責任だ。』

おじさんは真夏の西日が射す地面をじっと見つめた。そしてまた顔を上げると、銀色に輝く湖の方を眺めながら、ぼつりぼつりとしゃべり始めた。

『やっぱり、よくわがねえな。でもなあ、子供や孫のためにやるしかないべえ。一生懸命働いてなあ、金稼いでなあ、セシウムが少ない食べ物買ってよ、それを子供に毎日食わせんべえ。畑の野菜はよ、セシウムが入ないように何とか工夫すんべえ。でも、やっぱりわがねえなあ。でも今俺にできること、やるしかないべえ。』

私はほっとして答えた。

『偉そうなこと言っちゃったけど、ほんと言うと、俺もどうしていいかわがねえだ。何が良くて、何が悪いのか、よくわがねえだ。偉そうなこと言ってる先生方も、腹の中ではよくわがねえだよ。あと10年、20年たってみれば、ほんとのごとがやとわがねえ。ああ、悪いけどもう帰らないといけねえ。親戚のみんなが車のとこで待ってた。』

『ああ、どうも、どうも。今日は、かなり突っ込んだ話ができて、面白かったなあ。』

『俺の方も面白かった。じゃあ、また来年の夏も来っからな。』

『ええっ？ 来年の夏も来てくれんのかー？ 』

『ああ、もちろんだべ。御先祖様の墓参りがあつから、毎年お盆には帰って来っぺ。ほんじゃ、来年の夏、また遊びに来んべなあ。』

『ああ、ありがと。じゃあ、また来年なあ。』

セシウムに

まだ汚されていない

遺伝子という

大切な 大切な

預かりもの



9

やがて多くの親と学校の先生そして村や町役場の職員が立ち上がって、放射能の除染を始めた。まず最初に子供たちが通う幼稚園、小学校そして中学校のグラウンド、通学路の放射能除染を開始した。それから自分の家の庭、樹木を除染し始めた。できるだけ多くの住民が参加して、自分達のふるさとの土をきれいに掃除しようとした。しかしせっかく道路や田畑を除染しても、山のセシウムが雨水といっしょに道路や田畑に流れ落ちて来るので、何度も何度も除染しなければならなかった。また、これからふるさとの町に帰って元の生活ができるのかどうか、またよその町で新しい仕事が見つかるのかどうかかわからず、深刻な問題はたくさん残った。しかしその反面、日本はもちろんのこと世界中からボランティアの方々が助けに来てくれた。またたくさんの救援物資、義捐金そして歌や絵などが福島に送られてきた。その結果、福島の人々は世界の中で孤立するどころか、今まで以上に世界中の人達とつながり始め、その優しい心遣いは暗い絶望感の中でかすかな光のようだった。

米も野菜も

猫も人間も

生きとし生けるもの

みんな、みんな

復活しようよ



10

福島原発が爆発するまで、毎年四月になると、私は原子力発電所の近くにある三春町へ行っていた。そして原っぱの中央にぽつんと咲いている「滝桜」という大きな、大きな桜の花を、ぼんやり見上げることにしていた。薄紅色のしだれ桜は、名前の通り滝のように、華やかに咲いている。そして温かい春風になびく姿は、ただ華やかなだけではなく、青空を背景にしているせいか、清々しく、爽やかでもある。私はただ眺めるだけではなくて、桜の木の下で、団子を食ったり、ビールを飲んだり、ベンチで居眠りしながら、二、三時間のんびりと過ごす。そして来た時よりもなぜか元気になって、私は東京へ帰って行く。それが私の習慣だった。ところが今年の四月、私は行かなかった。三月に起きたセシウム騒ぎに動揺し、こわくなって、私は行かなかったのだ。そのために滝桜へ何か悪いことをしてしまったかのような、何か罪悪感のような気持ちを、私はこの、四カ月の間感じ続けた。だから来年は行く。来年の四月は必ず行く。行ってあの滝桜に会い、お詫びをする。そしてまたぼんやり花を見上げ、団子を食べ、ビールを飲みながら滝のような生命力をもらい、私も復活するのだ。そしてこれからは毎年四月になったら、三春町へ行き、滝桜に会って、たった二、三時間だけれど、いっしょにのんびり過ごすのだ。確かに福島原子力については、未解決の問題がまだたくさん残っている。それを解決するには、あと何十年いや何百年かかるかもしれない。しかし滝桜はその間も生き続ける。復興のシンボルとして、福島の人々といっしょにあと何百年も生き続ける。人間が大切に面倒をみれば、滝桜はあと千年は持つ。そして放射能汚染が完全になくなったあとも、滝桜は三春の土地に生き続け、毎年春になったら、また滝のような花を青空に咲かせるだろう。もちろん千年後に私たちはみんな亡くなっているだろう。しかしそのかわり私たちの子孫がこの滝桜を眺めているだろう。

でっかい滝桜

みんなだよ

まあくまあく囲んでよ

賑やかな花見

またやんべえよ



プロフィール

会津太郎(日本)は1954年、[福島県大沼郡会津美里町](#)(旧会津高田町)に生まれる。1986年、32歳の時に、詩集『私の彼方』を自費出版した。その後、俳句結社「鷹」に所属し、[藤田湘子](#)、[飯島晴子](#)の指導を5年間受けながら俳句を詠み、そしてまた[草壁焰太](#)の指導を10年間受けながら、[五行歌](#)にも取り組んだ。2005年9月に五行歌集『いとしい地球よ』を出版。さらに2010年9月には[アメリカ](#)で出版されたアンソロジー詩集『Catzilla!』の中に、猫の英語五行歌が欧米人と共に3篇選ばれ、掲載された。2011年1月には、日本人初の英語の私家版五行歌集『THE LOVELY EARTH』をアメリカの出版社から発行した。そして2011年3月には、英語の五行詩集『THE LOVELY EARTH』を、そして4月にはフランス語の五行詩集『La Terre Précieuse』をアメリカの出版社から発行した。その後、2011年8月と11月に、アメリカの国際的な短歌雑誌『ATLAS POETICA』(Number9, 10)の中に日本語、英語、フランス語の五行詩が合計50篇、英語のエッセイ、そして英語五行詩集『The Lovely Earth』の書評が掲載され、英語五行詩([Gogyohshi](#))が特集された。また2011年12月1日に私家版の日本語五行詩集『いとしい地球よ(二)』を発行した。その中には、五行詩だけではなく、新しいジャンルの五行連詩と五行詩文の作品が含まれている。さらに、2012年5月に、アメリカで出版された英語短歌のアンソロジー詩集『TAKE FIVE VOLUME 4』の中に、3篇の五行詩が英語五行詩集『The Lovely Earth』から選ばれ、英語圏の詩人と共に収められた。日本国際詩人協会会員